



中山 欽吾 なかやまきんご  
iichiko総合文化センター館長  
(公財)大分県文化スポーツ振興財団理事  
大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長  
(公財)東京二期会理事長

## 大分に芸術短大がある不思議

本県には、音楽と美術を専門的に教える県立の高校と短大がある。同じキャンパス内に併設されている県立芸術緑丘高校と、筆者が学長を務める県立芸術文化短期大学がそれで、いずれも音楽科と美術科を有しており、東京、大阪や名古屋といった大都市圏以外では珍しい存在だ。

なぜ本県に芸術系高校・大学なのか、という疑問を紐解くと、実は大分出身の彫刻家で、文化勲章受章者でもある朝倉文夫などが中心となって、大正10年に、九州にも公立の美術を学ぶ大学を設立すべきだと考えて「九州美術専門学校建設に関する具申書」を文部省に出しているのだ。

その具申書は、古くから磨崖仏等の仏教美術が栄えた環境を持つ大分こそが、その主要中心地たるべき運命を有しているのだと述べている。この具申書は国の受けるところにはならなかったが、後にその遺志を継いで、まず芸術を教える新制県立高校が別府に誕生した。それが県立緑丘高校で、その後設置された専攻科が短大となって、朝倉の遺志を曲がりなりに実現することになったのだ。その際、美術に加えて音楽専攻も同時に発足したのは、県出身の音楽家の存在と無縁ではない。後にキャンパスを高校ぐるみ大分市内に移転して現在に至っている。

2006年、短大は法人化され、美術科、

音楽科に加えて、地域の子弟、特に女性に対する教育に力を入れるために、人文系の2学科を加え、学生数約900名の規模へと成長している。さらに2007年には、芸術系2科に2年制の認定専攻科(造形専攻、音楽専攻)ができ、修了時に国の修了認定を受けると、4年制大学の卒業資格(学士号)が与えられるというユニークな存在となった。

短大の学生は、北は北海道から南は沖縄まで、30近い都道府県から集まって来ている。先輩から大分の情報や、授業料が年間39万円という公立短大ならではの特長を聞いて、応募してくるのだ。美術科、音楽科が主たる入学先だが、最近では人文系も県外からの学生が増える傾向にある。

美術専攻とデザイン専攻を有する美術科や、総合音大並みの専門を持つ音楽科で学んだ学生は、卒業後も有名音大や美大、専攻科終了の学生は大学院への進学が可能である。優秀な学生も多く、音楽家やデザイナーとして、国内外で著名な活躍をしている先輩もいて、芸術系教育に関する限り本県は立派な先進県となったのである。



毎年恒例の音楽科定期演奏会では、卒業生も加わったフルオーケストラと人文系の学生も加わる100名規模の合唱で難曲を演奏する。また、最近では、オーケストラピットでのオペラの演奏にも挑戦しており、2015年からは正式に吹奏楽演習も加わって、充実度を高めている。



学生数で半分を超える人文系では、社会学系、心理学系、情報メディア系、観光マネジメント、現代キャリア、国際交流《7カ国語を教える》など幅広い専門教育を提供していて、最近では短大卒業後、さら

に国公立4年制大学の3年次に編入学する学生が増え、その後も大学院に進んで修士号を取る学生も出てきた。ここでも、短大時代の充実した教育と、授業料負担の軽減が、全体としてのキャリアを支えるベースになっている。

県外出身者の半分近くが大分県内で就職する事実も、大分の気候風土がマイルドで住みやすいことや、先生と学生の距離が近い充実した学生時代を送り、住み慣れた大分で働きながら、卒業後も友人達との交流を続けられることが魅力になっているのではないだろうか。地方で顕著となっている若者の大都会への流出に歯止めを掛ける存在としても本学の存在意義は大きくなっている。

